

「Design+」展では、マイケル・ラウによってアクリルケースに収められた101体のフィギュアが人気を呼んでいた。そのフィギュアが大きなスペースを占める空間の傍らに、日本からの参加アーティスト、クワクボリョウタ氏のゲーム作品が初期型「ヴォモダ」とともに展示されている。前出の「映像体験ミュージアム」展での「ヴォモダ」はTV電話型で、しゃべる音声によって勝手に笑顔やししゃべり顔をあててくる、コミュニケーションのズレを視覚化した可憐な作品である。本展ではゲーム機型で、よりコンパクトに手にとれるものであった。彼もまた、明和電機らと同じく山口氏に学んだ学生の一人であり、米サンアントニオで開催されたSIGGRAPH2002エマージングテクノロジーでも注目されていたブロックデバイス作品の作り手である。

このように、二日目の移動セッションは、VR的なものに限らずメディアアート作品としても興味深いものを温故知新し、多数見ることができた一日であった。その夜には、評議委員の吉田ひさよ氏や、関根千佳氏、平賀基督氏、早稲田大学の吉田知史氏とともに士林夜市を練り歩き、龍だらけの古寺でTVディスプレイが売られているというナムジュン・パイク的風景に迷い込み、西瓜汁（スイカジュース）やぼんちりなどを屋台で食べて台北を満喫したものの、今回は足ツボマッサージなどの健康系体験は逃してしまった。後日、館初代会長や大橋力先生が皆で足ツボを体験される様子を記録ビデオで見る限り、2000年に筆者が体験した阿鼻叫喚はなかったようである。VR文化フォーラム in バリはイラストで報告したが、可能ならば、あらゆる日本／世界の秘境での開催がささやかれている次回までに、台湾でのハイテンションな数日間も手描きで報告し、少しでも追体験していただくことができれば幸いである。



図5 山口勝弘作品の前で・頼瑛瑛副館長と

◆移動セッション2 宮殿音楽鑑賞（国父記念館） 三浦雄文

東京工業大学

第二日目午後からは、国父記念館へ移動し、国父記念館の説明および中国の伝統楽器の鑑賞を行った。

この国父記念館は、建国の父「孫文」の生誕100年を記念して建てられ、1972年に完成した、高さ約30メートルの荘厳な中国宮殿様式の建物である。この建物の正面階段を上ったホールに、高さ6メートル弱の「孫文」座像（図1）があり、我々が到着したときは、ちょうど、座像警護の交代の儀式（図2）が行われていた。



図1 「孫文」座像
左下に銃剣を持った兵士がいます



図2 座像警護の交代の儀式

交代の儀式が終了した後、国父記念館の館長室へ移動し、館長から国父記念館についての詳しい説明が行われ、いよいよ国父記念館の見学が開始されようとしたとき、時間の関係から急遽、伝統楽器の鑑賞を行うこととなった。また、鑑賞後はすぐとバスに戻ることであり、結局、国父記念館の見学はできず、非常に残念だった。

伝統楽器の鑑賞は、国父記念館の一角、編鐘のレプリカが備え付けられている部屋で行われ、編鐘と中国の民族楽器による、小演奏会が催された。ここでは、4曲演奏され、1曲目は中国の古典、2曲目は台湾の民謡、3曲目は中国の民謡、最後の曲目は西欧の曲となっていた。

この編鐘という楽器(図3)は、1978年、中国の湖北省の「曾侯乙墓」から出土され、65個の鐘(鈕鐘19個、甬鐘45個、又楚恵王が贈った鐘1個)からなる大きな楽器であり、全体の長さは10.79メートル、高さは2.73メートル、総重量は約2500kgとなっている。各鐘は大きさと音の高さを順序として8組に編成され、3段の梁に掛けてある。また中段の梁および下段の梁は、青銅器の人形が頭、手の甲で支える形で保持されている。この楽器は約2400年前に実際に使用されていたことが資料に残っている。

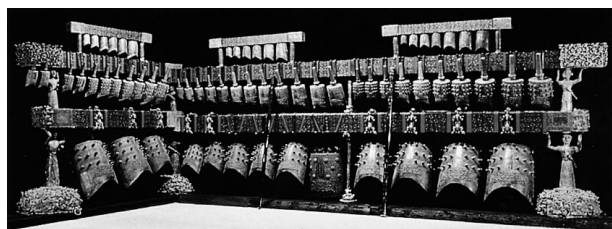


図3 「編鐘」全体

下段中央の取付角度の違う鐘が、又楚恵王が贈ったもの

この編鐘の最大の特徴は、1つの鐘で中央と右の2箇所を叩き、そのときの音程が変化する(右側の方が中央より約短3度高い)ところである。これにより、65個の鐘から、100音以上の音程を出すことができる。また、音域も5オクターブあり、しかも低音の鐘は、西欧の同音程の鐘と比べ、少ない質量で実現されていることも、特徴としていた。しかし、実際叩いているのを聞くと、かなり音律を感じにくい音であった。これは、おそらく鐘の上音列(種々の振動モードによる固有振動数列)が倍音の構造から若干外れているため、感じにくくなっていると思われる。

特に最低音あたりの鐘は倍音構造がかなり崩れていて、ほとんど鐘の音律を感じられなかった。また、演奏では、低音部としては、最低音の鐘はほとんど使われず、最低音の1オクターブ上あたりの鐘から、音名C、D、Gに対応する鐘だけをTimpaniのように使っているのみであった。

演奏会には、上記の編鐘と共に、中国の楽器の琴、琵琶、笛、笙、32個の青銅片を紐で吊るしたペンチン(図4)と呼ばれる打楽器との編成で行われた。1曲目の中国の古典の曲は、中国の古来の音階による旋律を、編鐘と琴、笛で斉奏する曲で、ちょうど、「君が代」の最初の部分(和声が始まる前の部分)の感じで、音楽が進んでいた。

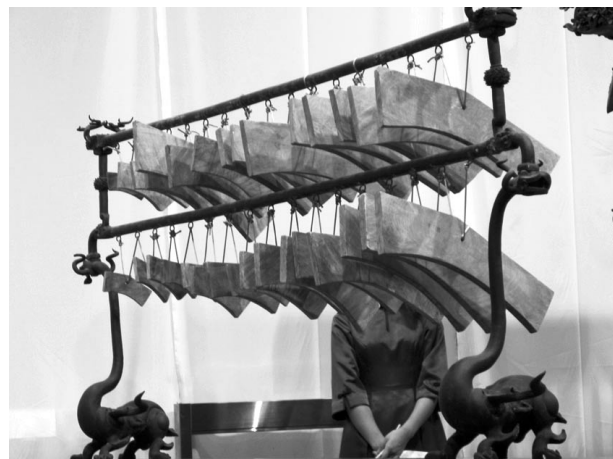


図4 「ペンチン」

上下2段に32個の青銅片が取付けられている

2曲目以降は、和声や対旋律等の豊富な曲であり、明らかに西欧の音楽理論に基づく曲となっている。こういった曲は、現在の我々が聞きなれている曲であり、曲として違和感ほとんど無かった。しかし、こういう和声重視される曲では、編鐘の音律の悪さが特に耳についた。また、低音の鐘の音の大きさ(音量)が高音の鐘に対しあまりにも大きく、編鐘全体を1つの楽器として考えた場合、非常にバランスの悪い楽器となってしまうように感じた。

全体的な感想としては、2400年前にこれ程大掛かりに、複雑な形状(叩く位置により、倍音列を変更できる)の鐘を多数作成した技術力には、とても感動した。この鐘は音響的に非常に興味をそそられる対象であり、機会があったら是非調べてみたいと感じている。